西南学院大学　人間科学論集　第 19 巻　第 2 号　　31 ― 49 頁　2024 年 2 月

自然体験学習の哲学再考

― エディブル・スクールヤードに蘇るソロー「より高い法則」―

山本孝司・小畑千晴[1]・デスマレス エリック[2]・安久津太一[3]

Reconsidering on the Philosophy of Experience of Activity Learning in Nature; Thorou's "Higher Law" revived in the Edible Schoolyard Program

Takashi Yamamoto, Chiharu Obata, Eric DesMarais, Taichi Akutsu

自然体験学習は、子どもの生活経験を中心に据えた経験主義カリキュラムとして、古くは世界的に生起展開した新教育運動の中でその重要性が説かれてきた。近年のわが国では、子どもたちの自然体験を含めた体験不足が指摘され、学校教育をはじめ体験学習の機会が意図的計画的に取り入れるよう試みられてきた。その中でとりわけ「自然体験」に関しては、教育基本法第 2 条で「教育の目標」に掲げる「四　生命を尊び，自然を大切にし，環境の保全に寄与する態度を養うこと」へと繋がる実践として、環境保護の観点からも注目を集めてきた。本稿では、「自然に関わる体験活動」に焦点を当てて、アメリカにおけるエディブル・スクールヤードによるエコリテラシー教育の実践とその源流に位置するネイチャー・ライティングの祖ヘンリー・D・ソローの思想を手がかりに、原理と実践理論というメタレベルとメゾレベルで考察を行い、今日のわが国の学校教育における実践プログラム構築に向けた示唆を得ることを試みた。

[1] 岡山県立大学保健福祉学部子ども学科准教授
[2] 岡山県立大学保健福祉学部子ども学科准教授
[3] 岡山県立大学保健福祉学部子ども学科教授

1. はじめに

(1) 問題の所在

本稿の主題である自然体験学習の歴史的な源流は古く19世紀末に世界的に生起した、いわゆる「新教育」まで遡ることができる。そこでは教育（学習）における子どもたちの活動的要素を基軸とした生活経験学習の一つとして自然体験が重要視された経緯がある[(1)]。

こうした自然体験学習は、経験主義カリキュラムの内容として戦後わが国においても、教科主義カリキュラムと対置されながら繰り返し注目を浴びてきた。「自然体験」を含む子どもの経験に関して、近年、わが国のカリキュラムでは、1989年学習指導要領改訂で小学校教育課程の中に「生活」、1998年改訂学習指導要領で小学校、中学校、高等学校の教育課程の中に「総合的な学習の時間」が設置され、教科学習の内容と学習者の経験との結びつきが重視され、学習過程における学習者の経験の意義の見直しが図られてきた。

他方で、都市化少子化、地域における人間関係の希薄化による青少年の自分の身体を通して実地に経験する体験活動の不足が指摘され、今日の青少年は、自然や地域社会と深く関わる機会の減少、集団活動の減少、物事を探索し、吟味する機会の減少等で集団活動の中で協調生や自律性を育んだり、「知」を総合化し、課題発見能力や問題解決能力を高めたり、学習意欲を促進したり、幅広い年齢層との多様な交流の機会を逸してしまっていることが懸念されている。こうした中で、1998年改訂学習指導要領以来身につける学力として位置づけられてきた「生きる力」との関わりでも自然や社会に実際に触れるこうした体験活動の重要性が繰り返し唱えられ、2017年改訂学習指導要領の中でも「体験活動」の充実が求められている。文部科学省によると、この「体験活動」としては、「ボランティア活動など社会奉仕に関わる体験活動」「自然に関わる体験活動」「勤労生産に関わる体験活動」「職場や就業に関わる体験活動」「文化や芸術に関わる体験活動」「交流に関わる体験活動」等があげられていた[(2)]。

こうした動向を踏まえ本稿では、体験活動のうち「自然に関わる体験活動」に焦点を当てて、アメリカにおけるエディブル・スクールヤードによるエコリテラシー教育の実践とその源流に位置するネイチャー・ライティングの祖へ

ンリー・D・ソロー（Henry David Thoreau, 1817-1862）の思想を手がかりに、原理と実践理論というメタレベルとメゾレベルで考察を行い、今日のわが国の学校教育における体験学習の実践プログラム構築に向けた示唆を得ることを試みる[(3)]。

(2) 先行研究及び考察の視点

先行研究に関して、ソローに関しては、伝記的研究として、アメリカではハーディングの『ヘンリー・ソローの日々』（*The Days of Henry David Thoreau*）と国内においては山田正雄『ソロー・《ウォールデン》・自己実現』があり、両者はソローの日記を含めた著作集に基づき、ソローを多角的多面的に描くことが試みられている[(4)]。

教育思想としてのソロー思想を主題とする研究は、筆者の管見する限り、国内においては古川と齋藤の二つの研究がある[(5)]。その他、教育をキーワードにしたソロー研究としては、彼の受けた教育遍歴を扱った上岡の研究と、ソローと当時のハーヴァードの教育に関する飯田の研究がある[(6)]。

他方で、文学や政治思想との関連でソローを取り上げた研究は、国内外において数多く存在する。文学の領域では19世紀ニューイングランドのトランセンデンタリストであり、アメリカン・ルネサンスのカノン作家の一人としてとりあげられるのが通例であり、政治思想においては彼の「市民の反抗」（Civil Disobedience）を中心に民主主義のあり方に関わる研究がポピュラーである。

文学領域のなかで、とりわけネイチャー・ライティングや環境保護、環境倫理と関連づけたソローの研究として、ビュエル（Lawrence Buell）が『環境的想像力―ソロー、ネイチャー・ライティング、そしてアメリカ文化の形成―』（*The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and Formation of American Culture*）の中で、環境保護の視点からソローの文学的位置づけを行なっており、環境保護文学者ソローのイメージ定着に一役買った[(7)]。国内では、田中聡子が、ソローが「環境のソロー」（Green Thoreau）という名声を得るに至る過程を彼の存命中から今日に至るまでレビューを行なっている。また、『コンコード川とメリマック川の一週間』（*The Concord and Merrimack Rivers,*

1849）を素材に、前出の上岡がソローを環境史家として位置づける試みも行っている[8]。

その他、自然との関わり、自然認識をテーマとしたソローの文学、言説研究は、杉浦、関口、西尾、高橋、小野等国内でも多数行われている[9]。

エディブル・スクールヤードに関しては、この事業を発案し校外協力者として支援を行なっているアリス・ウォータース（Alice Waters, 1944-）とこの事業に着手した「マーティン・ルーサー・キング Jr 中学校」（Martin Luther King Jr. Junior High School）の実践記録が出版されている[10]。

本稿では、こうした先行研究を踏まえつつ、ソローのエコロジー思想をエディブル・スクールヤードの実践解釈に援用するとともに、その実践に流れる彼の思想の導出を試みたい。

2. ソローの自然観と環境倫理

(1) ソローの自然観

ソローは、文学史上「アメリカ・ルネッサンス」（American Renaissance）の作家として、また思想史上「ニューイングランド・トランセンデンタリスト」（New England Transcendentalist）の一人として数えられる。44 年の生涯のうち彼が存命中に発表した著作は『コンコード川とメリマック川の一週間』と『ウォールデン』（*Walden*, 1854）の二冊のみで、その他講演を活字にしたものはあったが、二冊の著作はいずれも彼が生きている間は注目されることはなかった[11]。彼に関してはむしろ「市民の反抗」（Civil Disobedience）等の政治問題を扱った講演に基づくエッセイの方が有名で、こちらについてはインド独立の指導者ガンディー（Mahatma Gandhi, 1869-1948）や 1960 年代のアメリカ公民権運動の指導者キング牧師（Martin Luther King Jr., 1929-1968）に影響を与えた書として知られる。

とはいえ、今日知られるソローの著作で最も有名なのは前出『ウォールデン』であろう。彼は 1845 年 7 月から 1847 年 9 月までの約二年二ヶ月を、自宅から 1 マイル離れたウォールデン池畔に自分で小屋を建てて自給自足の生活をしたことで知られる。『ウォールデン』の「住んだ場所とその目的」では次のように

「森の生活」に入った動機が述べられている。「私が森へ赴いたのは、人生の重要な諸事実に臨むことで、慎重に生きたいと望んだからである。さらに人生が教示するものを学び取ることができないものか、私が死を目前にした時、私が本当の人生を生きたことを発見したいと望んだからである。人生でないものを生きたくはない。生きるということはそれほど大切なのであるから、やむにやまれぬ事情がないかぎり、諦めることはしたくなかった。人生を深く生き、その精髄をことごとく吸収し、スパルタ人のように強靭に生きたかった。そのためには人生に値しないものはすべて放擲し、大胆にわが道を進み、苦労を惜しまず徹底的に厳しい生き方を課し、人生を窮地にまで追いつめ、人生を堕ちる所までおとしてみることだ。もし、人生が卑しく、みじめなものであることがわかれば、そのときこそ、ありのままの、みじめさの実体を全部受け入れて、それを世間に公表したいと思う。あるいは、もし人生が崇高なものであれば、自らそれを経験し、来世でその真実のことができるようになりたいと思っている」[(12)]。

この間に記した日記をもとに「森の生活」終了後さらに二年の歳月を要して『ウォールデン』が出版される。ちなみに自然を取り扱ったソローの今一つの代表作『メインの森』(*The Maine Woods, 1864*) は、彼の他界後の出版になるが、この著作も出版後ながらく注目されることはなかった。

ソローの自然観察眼に注目が集まり彼の著作が再評価されるきっかけになったのが、「アメリカ環境文学の聖人」[(13)] という呼称で、21 世紀文学である「ネイチャー・ライティング（環境文学)」の源流に位置づけられたことによる。彼の『ウォールデン』はレイチェル・カーソン（Rachel Louise Carson, 1907-1964）の『沈黙の春』(*Silent spring*) とともに環境文学の代表的作品として読まれることとなった。

エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）の著作の手法と同様に、ソローの著作の材料は日記に書き残した記述であった。彼の日記のうち特に 1851 年から 53 年の間の日記の特徴として自然物の観察に多くの紙幅が割かれていることである。彼のウォールデン池畔での「森の生活」は 1845 年の独立記念日から二年三ヶ月の間であり、この生活については“Fact Book”に記されてい

た。彼はここに記された事実描写をもとに日記の中で自身の思索内容を交えつつリライトしている。1853 年 3 月 5 日の日記では自身を「神秘主義者、超越主義者、おまけに自然哲学者」(a mystic-a transcendentalist & a natural philosopher to boot)[14] として位置づけている。

後世の環境保護活動の視点からソローは“Green Thoreau”[15] と呼ばれ、野生動物等自然保護等環境保護思想家の古典的第一人者と見なされている。20 世紀末に、人間と自然の動植物の同等を訴える「エコ中心主義」(ecocentrism) が登場すると、ソローにも“ecocentrist”と冠され、彼の『ウォールデン』をはじめとする著作は人間中心主義文学のアンチテーゼとして読まれる傾向を強めた。なるほどソローは、エッセイ「歩く」(Walking) の冒頭で、「私は『自然』を弁護するために――単なる市民的自由や市民的教養とは対照的な、絶対的自由と野性を弁護するために――一言述べてみたい。つまり、人間を社会の一員としてではなく、むしろ『自然』の住人、もしくはその重要な一部として考えてみたいのである」[16] と記していたり、「エコ中心主義」の先駆的発言をしていたのも確かである。

(2) 生態学的観察眼

①関係として捉える

「自然哲学者」を自称するソローであったが、彼の観察眼は、いわゆる近代の自然科学的な方法に集約されるものではなかった。ソロー曰く「本当に私の関心があるものはそこにはなく、それと私との関係である。…（中略）…科学者は次のような過ちを犯し、多くの人々も科学者と同様である。すなわち、現象を自分とは無関係の独立したものとして冷徹に見ているのである。重要な事実は、それが私に与える影響である」[17]。ソローによれば「純粋に客観的な観察というのはありえず、興味があり意義があるためには、主観的にならざるを得ない」[18] のであった。ここには近代自然科学的な分析で求められる客観的な観察眼としての、対象を客体として観察者から切り離し距離を空けて眺めるという姿勢とは異なる方法が示唆されている。ソローに限らず 19 世紀ニューイングランド超越主義では、エマソンの「自然は精神の象徴である」(Nature

is the symbol of Spirit)[19] という言葉が表すように、自然を自己の精神の表現として捉える自然観をもっていた。ソローもその例に漏れず、彼の著作の中でこうした自然観がいたるところに散見される。ただしソローの場合は、エマソンよりも具体的直接的表現で示される。例えば「大鷹のつがいが空高く弧を描き……まるで飛翔する大鷹は、私自身の思惟が具体的な形をとったようだ」[20] という表現のようにである。

ソロー自身も、自然の事物事象を、「事実」としてそのまま記述するという方法をとらず、彼自身の思索と関連させて自然を思うままに擬人化したり、自然を人間の精神活動の象徴として表現した。ソローにとって、物質と精神は不可分に取り扱われる類のものであった。1857 年の日記には「私は動物を常識的な意味で野蛮であるとは考えない（I do not consider the other animals brutes in the commons sense.）」[21] と述べており、『ウォールデン』の中では、ジャコウネズミが「兄弟」、鯉は「同期生で隣人」、コンコードに根付く植物は「同居人」、そのほか「星」にも「仲間」という呼称を用いている[22]。彼にとって「地球というものは、書物のページのように地層が積み重なって、主に地質学者や考古学者たちの研究の対象になる死んだ歴史のたんなる断片ではなく、花や果実を実らせる先がけともなる木の葉にも似た、生きている詩歌」[23] であった。ソローは、人間や動植物のみならず鉱物としての大地を含めた自然のすべてが有機的関連をもつとの自然観・世界観をもっていた。

このような自然と自己との間の対応関係に基づく有機的・全体論的自然観をもつソローには、自然研究は自己探求と同義であり[24]、自己を対象から切り離して傍観者的に自然や世界を眺める方法とは趣を異にしていた。たとえば『ウォールデン』の「豆畑」でソローは「……私は豆から何を学び、豆は私から何を学ぶのだろうか？」という自問をしているが、彼が「豆というものを知ろうと決心した」[25] と述べるとき、彼は豆という植物を還元主義的に分析してその科学的成分を知ろうとしたのではなく、豆に関連して為される「種蒔き、鍬入れ、穫り入れ、脱穀、選別、販売」を含む、自身の経験とそれにかかわる思考と感情といった精神活動についてであり、それらは社会生活を営むという点で際限なく広がっていく学びである。このように、ソローには、自然を研究

することと自分自身を知ること、自分という個人を知ることを通して人間を知ること、自分という個人と自然や社会との関係を知ることは同義であった。

②簡素な「より高い法則」

上にみたように、ソローは自然を自身との関わりで捉え、自身を取り巻く社会全体へと広がるこの自然観に貫かれる法則は「簡素さ」(simplicity) であった。そして「まず、われわれ自身が「自然」そのものと同じように素朴で賢明な心の持ち主となり、われわれ自身の眉にかかる雲を払いのけ、ささやかな活力をわれわれの毛孔から吸い込もうではないか」[26] という言葉にあるように、それは同時に自然の一部としての人間のあるべき生き方であった。

ソローは、人間の生活必需品を「食物」「住居」「衣類」「燃料」の四項目をあげ、森の生活の中で簡素化を目指している。彼曰く「ほとんどの贅沢品や生活を快適にしてくれるものの多くの品物などは必要欠くべからざる物ではなく、むしろ人類の向上にとっては絶対に邪魔になるものだ」[27] と。このソローの発言は、産業化都市化の進んできた 19 世紀半ばのアメリカ社会を特徴づける物質文明に向けられていた。彼は「より少ないもので満足することを知らず、よりたくさんのものを手に入れようとする」[28] という物質的欲望を満たすための社会の制度や仕組みにより「ものを沢山持てば持つほど、それだけ貧乏になるのだ」[29] と警鐘を鳴らす。それに対し、簡素な生活の実践を通して抵抗を示した。

こうしてみると、ソローが自然の中に見出す「野性」(wilderness) 概念には、自然の属性を意味すると同時に、人工的なものからの解放というあり方も含意している。それは科学技術による自然の征服と人工的に製造された産業化都市化された社会から自由であるという意味合いでの解放であった。産業化都市化された社会にあって人間は、自ら作った人工的なものに支配され「道具のための道具」[30] に成り下がっているとソローは見る。

他方でソローは、「より高き法則」(higher law) があり、この「法則」とは自然や社会に備わっていなければならない本来的な「原則」であり、究極的には個人の「良心」に帰されると考えていた。『ウォールデン』の「より高き法則」

の中には次の行がある。「われわれの全生活は驚くほど道徳的である。美徳と悪徳の往還は一瞬たりとも中断することがない。善というものはまさに成功への唯一の投資である。世界中で奏でられている竪琴の調べの中で、われわれを感動させてくれるものは善行こそが投資であると主張していることだ。その竪琴とは『宇宙保険会社』がその規約を宣伝している勧誘外交員であり、われわれが宇宙の法則は無関心ではいられないどころか、永久に最も感受性の強い人間の見方である。どんな微風にも耳を傾けて、その戒めを心に伝えよ。そうした微風は確かに吹いているのだから」[31]。ソローにとっては、「より高き法則」によって自然もまた道徳的であり、それゆえに均衡が保たれている。したがって、その一部である人間もまた自然の調べに調和するように善くあらねばならないというのがソローの主張である。

③効率性への懐疑―永遠（eternity）の視点

アメリカでは産業化都市化の負の側面への対応が 1870 年代以降に求められるようになるが、ソローの「文明批判」は明らかにこの動きに先行していた。ソローの慧眼は、一時的な視野ではなく、時間を超越した「永遠」(eternity) という視野があったことによる。一時的で局所的な便利さ、効率のよさが、長期的に全体的に不利益をもたらすということは、自然界、産業界のみならず、個人の生活にとってもしばしば経験されることである。有機的全体論的に自然や社会をみるソローにとっては個人の生活が自然、社会と直結していた。産業に関しては、ソローは分業化を皮肉っている。「ニューイングランド人なら誰でも、このライ麦と玉蜀黍の産地で、自分のパンの原料はなんでも容易に栽培することができるのだから、遠隔の地にある不安定な市場をあてにする必要はないだろう。ところが、われわれは質素な生活と独立心を忘却し、そのためコンコードにおいてすら、新鮮で、おいしい粉を売る店はめっきり少なくなり、今でも粗びきの玉蜀黍や穀類を使う人はほとんどいない。大概、農民は自分の牛や豚には自分で作った穀物を与え、少なくともももっと栄養のない小麦粉を高い値段で店から買っている」[32] と。「人生の問題は物質的富が増加するにつれて複雑になる」とソローも述べているように、生産と生活とが直結していた

「簡素さ」が、市場と分業によって複雑化され、生産地と生産者が見えない匿名の商品に依存せざるを得ない状況が当時の田舎町ですら起こっていた。それに付随して人々の労働の物象化現象も必然的に生じている。ソローの目には、こうした状況が人間本来のあり方に背くものであり、それゆえに「道徳的」ではない生き方に映った。彼は言う。「比較的自由なこの国においてさえ、たいていの人間は単なる無知と誤解のために、しないでもよい苦労やよけいな、取るに足りない生活の仕事に追いまくられて、その素晴らしい人生の果実を手にすることができない。彼らの指はあまりにも使い過ぎたので不器用となり、ふるえるばかりで仕事ができない。実際のところ、仕事に追われる人間は自己本来の姿を取り戻す暇がなく、人々と最も人間らしい関係を維持していく余裕すらもない。だから彼の労働は市場価値を失うばかりだ。そうした人間は単なる機会になってしまうだけで、時間的余裕などもたない。自分の知識をいつも活用しなければならぬ人間が、どうして自分の無知を自覚することができるのか、それが己の成長にとって必要なことであるのに」(33)。

自然の一部として他の存在との関係によって人間を捉える自然観、人間観は、「時間」概念の再考をももたらす。ソローが生きた 19 世紀半ばのアメリカは、産業革命が進展し、交通手段として東部を中心に急速に鉄道網が発展した。鉄道の利便性は、それまでの川を行き来した船舶をはるかに凌ぐものであった。『ウォールデン』の中にもしばしば鉄道の描写が出てくるが、陸路をいく蒸気機関車は、正確な運行により時間的にも効率性を高めてくれた。ソローがこうした鉄道に対し歓迎的な態度でなかったことはよく知られているが、鉄道が自然を破壊し、付随して起こった産業により、さらに自然が破壊されるという、文明の進歩の負の側面を当時の彼は見逃していなかった。

このような背景をもちながらソローは「森の生活」に入り、自然や人間生活の中に単純性、簡素さを「よる高き法則」として探究し、個と全体との関係を単純化することによる本来のあり方の回復が目指された。

3. 自然体験学習への援用

それでは上にみたようなソローの自然観と自然観察の方法は、今日求められ

る自然体験学習にどのような示唆を与えてくれるだろうか。

存命中にソローは『ウォールデン』の中で、当時の教育に対する批判的な提言も行なっていた。彼にとって教育とは、「生き方」を教えることであり、それは学校教育を超えて、広く成人教育にまたがる営為として、時間的にも空間的にも広がりをもっていた。ソローはいう。「いかにしたら若者がよりすばらしい生き方を学ぶのかといえば、何はともあれ、ただちに生活の実験を試みることではないだろうか？これは数学と同様に学生の心を鍛えることになると思う。もし私が一人の少年に、例えば芸術や科学について学ばせたいと思っても、ありきたりのやり方で、その道の専門家のもとにただ預けるようなことはしない。そのようなところではなんでも教え、練習にはげんでくれるが、生きる術は教えてくれない」[34]。

学校における専門家とは、各学科内容の知見を有する教師である。教科主義（教師中心）カリキュラムにおいては、教育内容の系統性を意識した教授法に関心が集中しがちである。もちろんここでの教育内容は、それを学ぶ児童生徒にとって将来の生活に有用であるとの観点で精選されてはいるが、親学問となる科学の論理が強調されることにより、子どもたちの生活経験と教育内容との間に隔たりが生じる傾向にある。こうした教科主義カリキュラムの対極に位置づけられるのが経験主義（生活経験）カリキュラムである。ソローのいう「生きる術」としての教育内容は、児童生徒が実際の生活の中で直面する問題解決能力の方に焦点が当てられるという意味で経験主義（生活経験）カリキュラムに相当する。

ソロー自身は、兄ジョンと共同で「コンコード・アカデミー」（The Concord Academy）を創設し、短期間ではあったが教師経験を有していた。ハーディング（Walter Harding）によるとこのアカデミーでは「活動しながら学ぶ」という方針に従った、当時としては「新しい手法」が採られていたとされる[35]。そこでの教育プログラムが次のように紹介されている。「このプログラムの相当部分を現場実習にあてていた。少なくとも週一回、ふつうはそれよりはるかに多く、全校生徒で森や草原へ散歩に行ったり、川や池でボート漕ぎをした。当然予想されるように、こうした遠足のほとんどは博物誌の勉強のためであっ

た。あるときソローは、とても小さいので生徒たちにはほとんど気づかないある植物を摘み取り、虫眼鏡で完全なしかし非常に小さい花がちょうど咲いているところを見せてやり、少年たちをびっくりさせた。……子供たちは彼が鳥や動物、花を外科医のように解剖して知るのではなく、『少年が、とても愉快な、ちょっとした習慣や流儀で新しい友達と知り合う』ようだという印象を持った。……彼が高度な知識を誇示したいと思っていたという証拠は見つからない。ただ生徒たちに、自然の驚異を認識させ、この方面の技能を分け与えたかったのである」[36]。この他に、いわゆる職業的な教師として以外で、ソローが自然を通して日常的にコンコードの子どもたちとの間に教育関係をもったことは有名である。彼はしばしば近隣の子どもたちとハックベリーを摘みに出かけ、彼らと一緒に活動することで、人間と自然との関係を間接的に教えた[37]。

4. 食育菜園を通した自然体験学習の展開

(1) エディブル・スクールヤード

「エディブル・スクールヤード」(Edible Schoolyard) は、1994 年にカルフォルニア州バークレーのマーティン・ルーサー・キング・ジュニア中学校で取り組まれた学校改革の実践である。“Edible”とは「食べられる」を意味する。「食べられる校庭」といキャッチフレーズで、学校菜園を通して学習プログラムを中心とした学校変革が試みられた。このプログラムでは、食を通じて生命や自然とのつながりを教科横断的かつ体験的に学習することを目指している。

ところで、この改革は「外からの視点で学校の内側を変えるビジョン」として着手されたが、この「外からの視点」の提供者がアリス・ウォータースである。アリス・ウォータースは、1971 年にカルフォルニア州バークレーにレストラン「シェ・パニース」(Chez Panisse) を創業した経営者にしてシェフである。彼女は、カルフォルニア大学バークレー校の学生時代に、レイチェル・カーソン『沈黙の春』、フランシス・ムア・ラップ『小さな惑星の緑の食卓』に触発された「大地へ帰れ運動」、その他のカウンターカルチャーの影響を受けつつ、食をめぐる政治に関心を持ちつつ、「シェ・パニース」をオープンした。

アリスがここで抵抗したのは「ファストフード文化」であった。具体的には、画一性追求による食の多様性の喪失と食を取り巻く環境の非人間化であった。彼女は「スローフード文化」を対抗文化として提唱する。その際のキーワードが「シンプルさ」である。アリス曰く「シンプルさを大事にすることは、本質を愛することです。物事の輪郭がはっきり見えていることは、世界の混乱を切り抜ける力となります。偽物や、本質につながらないものを省くと、根本的で、本物の真実とつながることができるようになります。シンプルさは、自然の複雑さを否定しません。むしろその構成要素の一つひとつへの感謝であると言えます。シンプルであることは「多いほどいい」の対極にあり、「足るを知る」ことを思い出させてくれます」[38]。彼女のこの発言は、前にみた『ウォールデン』の中のソローの発言を彷彿とさせる。

アリスにとってこの「シンプルさ」には、生産と消費の関係において、食を通して地域をネットワーク化するという作業が伴った。この過程で、レストラン経営に関わる前には中学校教師の経歴をもっていたこともあり、「シェ・パニース」近隣のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア中学校の教育改革にもかかわり、校地に食育菜園を創ったのが「エディブル・スクールヤード」の起こりであった。ここでいう「食育」は、「エコリテラシー」を含めた幅広い概念であり、次項でみるように、今日ではバラバラに切り離されてしまった状態にあるものを「つなぐ」媒介としての鍵概念にもなっていた。

(2) 様々な体験のコアとしての食育菜園

アリス・ウォータースの手がけたエディブル・スクールヤードは、全米の公立学校を含む、多種多様な教育機関に波及し、日本国内でも 2016 年に東京都多摩市立愛知小学校、2017 年に近江八幡市立島小学校によって採り入れられている。ここではセンター・フォー・エコリテラシーが著した『食育菜園－マーティン・ルーサー・キング Jr. 中学校の挑戦』（原書タイトル：*Edible Schoolyard*）を手がかりに、その実践の特徴と背景にある哲学について導出してみたい。

まずカリキュラムに関して、食育菜園の存在によりガーデンとキッチンと教

室がつながりをもちながら学習が展開されるという特徴をもつ。ガーデンで、オーガニックフードを育て、キッチンで調理し、食事に出し、食べる中で、自分自身の身体や心を養うことを学ぶ。こうした活動を通して教室内外で地球を大切にする方法も学び取られる。もっとも、ここでは狭義の「食育」ではなく、ガーデンをコアとして様々な教科の知識が結びついた学びも展開されている。例えば、理科の教科学習の「浸食」を、ガーデンの一部を利用して実験を行ったり、梃子の原理を、ガーデンの作業の一環で重い育苗台を運ぶ際に実際に使用したりという具合である。特に後者に関しては、古代エジプトのピラミッド建造時の転方式で動かす仕方も採り入れるなら生活にかかわる歴史学習ともつなげられている。7年生の世界史授業では、ガーデンの収穫物を使用し、キッチンでピタパンとホムスを作って食べた経験が子どもたちに中東の人々の生活についてのイメージを形成することで、中東の歴史についての学習の基礎となる土壌を豊かにしている[39]。

さらにガーデンとキッチンは、子どもたちと自然との間をつなぐ。彼らは健康的な食べ物を育て食べることを通してエコロジーへの理解を深める機会がもたれている。キング中学校で理科を教えるイベット・マカラ（Ivette McCullough）教諭は次のように述べる。すなわち「キッチンとガーデンの両方があることで、私たちは現実に気づかされます。私たちの生命を支えているのは、ビニールでラップされたスーパーマーケットの食べ物ではなく、植物の生長なのだという現実を、子どもたちは、食べ物がほんとうはどこからもたらされるのかを認識します。子どもたちは、自分の行為がもたらす影響を体験を通して学び、そして自分に何ができるかを考えるようになります。自分の行為が違う現実をもたらしうるという、自分のもつ力を実感するのです」[40] と。理科に限らず、社会科においてもガーデンを拠点とした種から食卓までのゆっくりとした時間の流れを要する一連の活動が、効率性重視の工業化されたファストフード文化とそれに付随した社会病理へと目を向けるきっかけになる。こうしてガーデンとキッチンと教室の学びは校地の枠を越え、現実の世界とのつながりをもつ。

このような子どもたちの学習は、子どもたち同士の協同学習の形で行われ、

多様な経験を持つ子どもたちが様々な活動おける協力を通して、コミュニティ感覚（sense of community）を養うことにつながっているだけでなく、校内で教員間をコミュニカティブな集団へと作り変え、さらには農学をはじめとする専門家、造園技師、アリス・ウォータースらレストラン経営者、生産農家といった地域の様々な人々と学校とがつながり、コミュニティー・センターとしての学校の様相を呈するようになったことが、この中学校の校長ニール・スミス（Neil Smith）によって述べられている[41]。

このようなガーデンを拠点に学校内外でモノとコト、人、空間と時間との間に「つながり」がもたれ、それらの間を往還する幅広く深い学びでは、エコリテラシーという今日的な環境倫理との結びつきで、子どもたちの間に「道徳的である」ことについて考えさせるようになる。上に引用したマカラの発言にあるように、「自分の行為がもたらす影響」として善い結果をもたらすことを子どもたちは希求し、そのために自分に何ができるかについて思考するようになる。ここには傍観者としてではなく、自然の一部として自然について思考するかつてのソローと類似した「観察眼」が求められる。私との関係で捉える自然は、近代産業社会に浸透した「多いほどよい」に対して「足るを知る」ことを実践させてくれ、「簡単で、速くて、便利なこと」という具合に今日の矮小化された「シンプルさ」を問い直し、かつてソローが探求した近代的な効率性に集約されない「簡素さ」の意義を再考する機会をもたらしてくれよう。それは、学校、地域を越えて自然の万物との「つながり」の中で自己のあり方を考えることでもあり、複雑で多様なあり方の中に単純で道徳的なあり方を模索するソローの「より高い法則」の探求にも通じる姿勢である。

5. むすびにかえて

以上、本稿では、自然体験学習の原理、実践理論を考察すべく、ソローの『ウォールデン』を中心とした言説から導出される、自然を観る眼（自然観察の方法）とそれに付随した自然と人間との関わり方について浮き彫りにし、こうした関わりを今日のエディブル・スクールヤードの実践理論にも見出すことを試みた。

目下のところ、ソローのエコリテラシーの思想、エディブル・スクールヤードの取組みを踏まえながら、我々の研究チームは岡山県立大学を拠点に食育菜園を通した幼児教育における自然体験学習支援を始めている。ただし、教育者が子どもに対して直接的に行うのではなく、対象は幼児教育を学ぶ大学生である。次世代を教育する将来の保育者たちが、スクールヤードでの栽培体験と連関させた様々な学問領域（哲学・心理学・社会学・環境学・植物学・歴史等）と、自然と学問のつながりを学び、幼児期の子ども達への教育にどう展開させるか学生自身が考えるプログラム作りを行っている。具体的には、エディブル・エデュケーションが無償で公開している幼児向け食育プログラムを根拠とし、その翻訳と実践を通じて効果と課題を明確化し、日本の幼児向けの独自プログラムの開発を目指している。

AI の発達によって情報化社会が進化する中において、自然体験で得る五感の体験と感性の育成が必要であり、その育成は人間の早期段階である幼児期での体験がその後の人生に大きく影響を与える。その幼児期に携わる保育者にこそ、自然と人とのつながりに関する知識と体験が必要であると考えている。

≪注および引用≫

(1) イギリスにおけるセシル・レディー（Cecil Reddie）のアボッツホルム、ドイツにおけるヘルマン・リーツ（Hermann Lietz）の田園教育舎の実践、ケルシェンシュタイナー（Georg Michael Anton Kerschensteiner）の労作教育、アメリカにおけるデューイ（John Dewey）の教育理論に支えられた進歩主義教育の数々、日本における澤柳政太郎の成城小学校の実践がこれに相当する。

(2) 文部科学省初等中等局「体験活動事例集―豊かな体験活動推進のために」(平成 14 年 10 月)。

(3) Gillian Judson の学位論文「創造的エコロジカル教育」(Imaginative Ecological Education）では、エコロジカル教育の前提となるエコセントリズムの思想的源流を明らかにすると同時に、その実践として「エディブル・スクールヤード」が取り上げられている。Judson はエディブル・スクールヤードの拠って立つ「異なる前提」に関連し、「生態学の認識論的立場から見ると、自然は知識と認識の不可分の一部である。世界は私たちの認識に参加している。さらに、知ることは体系的であり、協力的である。ディラード（1974)、ロペス（1986)、ソロー（1961）の著作は、環境に応じた、ある種の知識を例示している」とソローの著作をあげて、両者の関連性を示唆している。(Judson, G., Imaginative Ecological Education（Thesis Submitted in Partial

Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy, in the Faculty of Education,Simon Fraser University, 2008））

その他として、UofA のスクール ガーデン ワークショップを主催するモーゼスは、自身の学校の庭園の重要性について「つながりと癒しの場所」としての自然についてのソローの概念と関連づけている。

(4) Harding, W., *The Days of Henry David Thoreau,* New York, Alfred Knopf, 1964./ 山田正雄『ソロー・《ウォールデン》・自己実現』大阪教育図書、2010 年。

(5) 古川明子「ヘンリー・デイヴィッド・ソローの教育思想―〈学校教育〉から〈生涯学習〉へ―」『教育学研究集録』第 24 集（筑波大学大学院博士課程教育学研究科）、2000 年、35-43 頁。齋藤直子「発達・超越・日常性：カベルによるソローの『ウォールデン』の再解釈」『近代教育フォーラム』13 号、2004 年、159-168 頁。この論考のなかで齋藤は、『ウォールデン』のなかで表される思考にもたらす衝撃的な出会いを、知的というよりも実存的なレベルにおいて理解し、そのような「非凡」な経験が我々の生活を通じて繰り返し生じうるような教育の必要性を説く。

(6) 上岡克己「森の詩人ソーロウ：第 2 章ヘンリー・ソーロウの教育」『岡山大学教養部紀要』22 号、1986 年、175-196 頁。飯田実「ソーロウとハーバードの教育」『ヘンリー・ソーロウ協会会報』第 7 号、1980 年、8-13 頁。

(7) Buell, L., *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and Formation of American Culture*, Cambridge, Harvard UP., 1995.

(8) 上岡克己「『コンコード川とメリマック川の一週間』再考―環境史家としてのソロー―」、『国際社会文化研究』第 10 号、高知大学人文学部国際コミュニケーション学科、2009 年、pp.1-15.

(9) 杉浦直子「『単純性』を求めて―ソローの Walden を中心に―」、『成城英文学』第 24 号、成城大学、2000 年、pp.1-20/ 関口敬三「H.D. ソローと宮沢賢治の自然観―エコロジーの視点から」『英米文化』第 31 号、英米文化学会、2001 年、pp.169-185/ 西尾一知衛「文化の中の自然　V―ヘンリー・ソローとアメリカ文化―」『愛知学泉大学研究論集』第 36 号、愛知学泉大学、2001 年、pp.173-182./ 高橋勤「ピュアであること―ソローにおける認識の行方―」『言語文化研究』第 16 号、九州大学大学院言語文化研究院、2002 年、pp.43-52/ 小野和人「ヘンリー・ソローの宇宙意識」『英語英文学論集』第 53 号、九州大学英語英文学研究会、2003 年、pp.1-19.

(10) アリス・ウォータース（小野寺愛訳）『スローフード宣言―食べることは生きること』英治出版、2022 年 / センター・フォー・エコリテラシー（ペブル・スタジオ訳）『食育菜園―マーティン・ルーサー・キング Jr. 中学校の挑戦』家の光協会、2006 年。

(11)『コンコード川とメリマック川の一週間』は 1000 冊印刷されたが 706 冊売れ残り、『ウォールデン』は 2000 冊印刷されたが売れたのは数百冊だったようである。Thoreau, H. D., *The Journal 1837-1861, Edited by Damion Seals Preface by Johon R. Stilgoe,* New York, New York Review Books, 2009, p.232. / Harding, W.（ed.）, *Thoreau: A century of Criticism*, Dallas, Souhertn Methodist University, p.21.）

(12) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, Boston, Ticknor and Fields, 1854, pp.98-99（H・D・ソロー（佐渡谷重信訳）『森の生活―ウォールデン―』講談社学術

文庫、1991 年、p.139.

(13) Buell, L., *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and Formation of American Culture*, *op.cit*, p.115.

(14) Thoreau, H. D., *The Journal 1837-1861, op.cit*., pp.178-179.

(15) Buell, L., *Foreword to Thoreau's Sense of Place*, Schneider, R. J.(ed.), Iowa, University of Iowa Press, 2000, p.ix.

(16) Thoreau, H. D., *Walking*, Cambridge, The Riverside Press, 1914, p.3(H・D・ソロー(飯田実訳)「歩く」、『市民の反抗 他五篇』岩波書店、1997 年、p.106.)

(17) Thoreau, H. D., *The Journal 1837-1861, op.cit*., p.475.

(18) Thoreau, H. D., *The Journal 1837-1861, op.cit*., pp.475-476.

(19) Emerson, R. W., Nature, *Works of Emerson,Vol.I*, Boston, Houghton Mifflin, 1903, p.25.

(20) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods, op.cit*., p.173(『森の生活』、前掲書、p.239).

(21) Thoreau, H. D., *The Journal 1837-1861, op.cit*., p.430.

(22) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., pp.88-107(『森の生活』、前掲書、「住んだ場所と住んだ目的」)。

(23) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, Boston, *op.cit*., p.330(『森の生活』、前掲書、p.442).

(24) 自然研究と自己探究の同義性については、エマソンの次のように明言している。「『汝自身を知れ』という古代の教えと、『自然を研究せよ』という近代の教えとは、採集的に一つの金言となってしまう」(Emerson, R. W., "American Scholar," *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson, vol.1*, Cambridge, Harvard UP, 1971, p.55.)

(25) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.175(『森の生活』、前掲書、p.241).

(26) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.85(『森の生活』、前掲書、p.113).

(27) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*. ,p.17(『森の生活』、前掲書、pp.27-28).

(28) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.36.

(29) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.71(『森の生活』、前掲書、p.95).

(30) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.41(『森の生活』、前掲書、p.57).

(31) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.234(『森の生活』、前掲書、p.322).

(32) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.69(『森の生活』、前掲書、p.92).

(33) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.8.(『森の生活』、前掲書、p.17).

(34) Thoreau, H. D., *Walden, or, Life in the Woods*, *op.cit*., p.56.(『森の生活』、前掲書、p.75).

(35) ウォルター・ハーディング(山口晃訳)『ヘンリー・ソローの日々』日本経済評論社、2005 年、p.116.

(36) 同書、pp.116-117.

(37) 次のようなエピソードが伝えられる。ある時、ある子どもがつまずいて転び、採

集した実を落としてしまった時に、残念がるその子に対しソローは、種子が広がっていくことをその子が手助けしたのだよと声掛けをしたそうである。(Salt, S. Henry, *Life of Henry David Thoreau*, New York, Haskell House, 1962, p.92.)

(38) アリス・ウォータース（小野寺愛訳)『スローフード宣言―食べることは生きること』英治出版、2022 年、p.180.

(39) センター・フォー・エコリテラシー（ペブル・スタジオ訳)『食育菜園―マーティン・ルーサー・キング Jr. 中学校の挑戦』家の光協会、2006 年、pp.93-102.

(40) 同書、p.107.

(41) 同書、pp.50-79.

【付記】本研究は、JSPS 科研費（課題番号：23K02285）の助成を受けた研究成果の一部である。

【Abstract】

As an empirically developed curriculum centered on children' s life experiences, experiential learning in the natural environment has long been emphasized in new educational movements around the world. In recent years, the lack of experiential learning for children, especially nature-based experiences, in Japan, has been pointed out, and attempts have been made to intentionally and systematically incorporate experiential learning opportunities into school education. In particular, "nature-based experiences" has attracted attention from the perspective that environmental protection as a practice leads to "cultivating an attitude of respecting life, valuing nature, and contributing to the conservation of the natural environment" which is state in Article 2 of the Fundamental Law on Education, "Goals in Education." In this paper, we examine "experiential activities related to nature" in the context of the practice of ecoliteracy education by school gardens in the United States and meta-level and meso-level principles and practical theories, taking cues from the foundational thoughts of Henry D. Thoreau, one of the early nature writers. From this analysis, we suggest how to construct practical programs in school education in Japan today.

西南学院大学人間科学部児童教育学科